

2012年9月17日  
0:17

## 読書会×エッセイ

読書会『魔法使いハウルと火の魔女』

ダイアナ・ワイン・ジョーンズ著

西村醇子訳

五月十八日、ファンタジー作家ダイアナ・ワイン・ジョーンズの代表作とも言われる『ハウル』で読書会を行った。著者の作品の中でもひときわ風変わりな魅力のある物語について、その魅力を語りたいと思い開催した。

本書のあらすじを簡単に述べると、少女ソフィーが魔女の呪いによって老婆となり、呪いを解くため悪名高い魔法使いハウルの城に住み込む。ソフィーは魔女と対決し、ハウルと結ばれる。めでたしめでたし。

このお話の筋だけ見ると王道のロマンストーリーに思えるのだが、その実は王道からはほど遠い。著者らしいひねくれた登場人物たちによるぶつ飛ぶ進行が、ストーリーを生き生きとさせている。特に急転直下の終盤は、少女が魔女（作中では魔魔だが、アンゴリアンとしての描かれ方からその性は魔女と言つて問題ない）と戦い、魔女から「王子様」を取り返すという、おどぎ話によく見られる展開そのものだ。

しかし、読者はこの展開を唐突に感じてしまう。本書は（日本では）児童向けのファンタジーとして出版されており、読書会参加者

もほとんどが初読は小・中学生の時で、当時は最後の展開がよくわからなかつた、という人が多かつた（私もその一人である）。特にソフィーとハウルの二人が結ばれることには、こまごまと伏線が張り巡らされているとはいっても驚いてしまう。しかし、もしラストにこのスピード感がなかつたらと考へると、かえつてだらけてしまい凡庸なお話になるのではと思う。成長してから読んで、ソフィーの気持ちや考えが理解できるようになつた、という意見もあった。小・中学生の頃に読んだ本を今読むと、こういう発見があるからいいと思う。私自身、この本の印象は読む度に変わつた。次に読んだ時には物語のどこをどんなふうに感じるのか、楽しみに思つてゐる。

読書会で作品の魅力を語り尽くせたかというと、主催者としては反省するところが多いが、参加者それぞれの持つ作品への印象を聞いたりハウルのような「心臓のない男の子」について盛り上がつたりと、楽しく話すことはできたと思う。

個人的にはこの夏休みに『』作品の魅力にせまるため彼女の物語に埋もれて過ごしたいと画策しているが、まずは遺作『アーヤと魔女』の日本語訳がこの七月十三日に発売されたのでそれを手に取りたいと思っている。もちろん挿絵は佐竹美保氏である。自信を持つておすすめする。

最後に、『ハウル』『アブダラ』に続くシリーズ三巻『 Houses of Many Ways』が日本語訳されることを願つて、（徳間書店さんお願いします）読書会の報告とさせていただく。以上。（灯子）